

山梨県金生遺跡における縄文時代の植物圧痕

中山誠二（山梨県立博物館）
佐野 隆（北杜市教育委員会）

1 遺跡の概要と分析資料

金生遺跡は、北杜市大泉町谷戸地内に所在する縄文時代後晩期を主体とする集落跡である（第1図）。昭和55年の発掘調査で縄文時代後期後半から晩期前半にかけて構築された大規模な配石遺構と住居跡が発見されたことから、昭和58年に国史跡に指定され、3,230m²が保存されている。縄文時代の遺構は、前期初頭の住居1軒、中期末葉曾利式期の住居2軒、後期堀之内式期の住居3軒、加曾利B式期の住居4軒、後期後半の住居4軒、晩期前半の住居12軒、晩期後半の住居4軒、後晩期だが時期が絞り込めない住居11軒、5基の大小の配石遺構などである。配石遺構には再葬施設とみられる石棺状の石組が含まれるほか、石棺墓、土坑墓も確認されている。後期後半から晩期にかけて、八ヶ岳南麓地域では遺跡数がごく限られるが、そのなかにあって葬送儀礼を主とした祭祀性の強い拠点的集落とみることができよう。

種子圧痕が確認された土器破片はいずれも粗製土器の口縁部と胴部破片である（第2図）。粗製土器であるため時期の絞込みが難しいが、後期中葉から晩期前半の所産と推測される。KSA-01からKSA-15は、後期後半から晩期前半にかけて構築されたとされる1号配石南側、D-6グリッド出土の粗製土器破片である。KSA-18は調査地区の北西角、晩期前半に位置づけられる21号住居周辺のG-9グリッドで出土している。



第1図 金生遺跡位置図

2 試料の分析方法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡(SEM)で観察する「レプリカ法」と呼ばれる手法を用いる(丑野・田川 1991)。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分のマイクロスコープでの観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の充填、⑥これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から転写・離脱、⑦圧痕レプリカを走査電子顕微鏡用の試料台に載せて固定、⑧蒸着後、走査電子顕微鏡(日本FEI製Quanta600)を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂(パラロイドB-72)をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤には歯科用印象剤JMシリコーンを使用した。

2 同定結果(表1、第3~4図)

KSA01(第3図1~4)

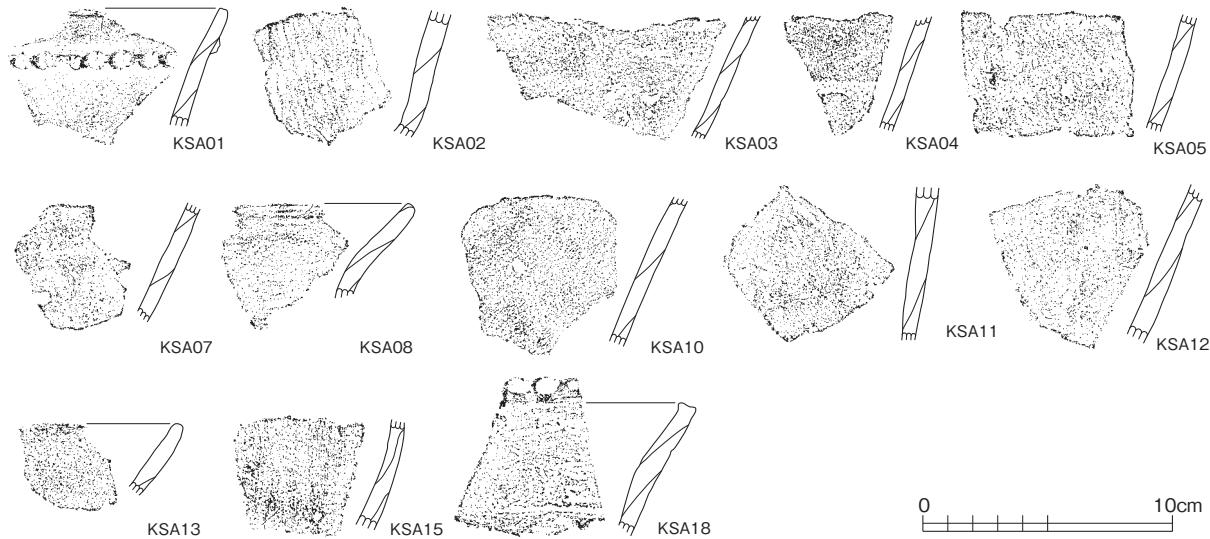
指頭による押圧文をもつ隆帯を施す深鉢形土器で、胴部内面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ5.6mm、幅3.0mmの狭卵形を呈し、先端部が尖る。表皮は若干の凹凸が認められるが、同定の鍵となる特徴が見られず不明種とした。

KSA02(第3図5~8)

無文の土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ2.8mm、幅2.4mm、厚さ2.0mmのやや扁平な橢円形を呈する。表皮に不明瞭な網状隆線が認め



第2図 金生A遺跡圧痕土器

表1 金生遺跡圧痕分析

番号	試料名	時代	時期	注記	植物圧痕の有無	植物同定
1	KSA01	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6クロ	○	不明種
2	KSA02	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-2カツ	○	シソ属近似種 (cf. <i>Perilla</i>)
3	KSA03	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-3カツ	○	シソ属 (<i>Perilla</i> sp.)
4	KSA04	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-3カツ	○	シソ属 (<i>Perilla</i> sp.)
5	KSA05	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-3カツ	○	アズキ近似種 (cf. <i>Vigna angularis</i>)
6	KSA06	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-3カツ	×	
7	KSA07	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-3カツ	○	シソ属 (<i>Perilla</i> sp.)
8	KSA08	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 D-6. 3 No. 16	○	シソ属 (<i>Perilla</i> sp.)
9	KSA09	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-4カツ	×	
10	KSA10	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-2カツ	○	不明種
11	KSA11a	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-2カツ	×	
12	KSA11b	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-2カツ	○	シソ属 (<i>Perilla</i> sp.)
13	KSA12	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 D-6. 2一括	○	不明種
14	KSA13	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-1カツ	○	不明種
15	KSA14	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6-1カツ	×	
16	KSA15	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6クロ	○	不明種
17	KSA16	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 AD-6	×	
18	KSA17	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 G-9. 4カ	×	
19	KSA18	縄文時代	後期中葉～晚期前半	金生 G-9. 4カ	○	植物纖維を撲った縄

られるが、臍（着点）は確認できない。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属近似種 (cf.*Perilla* sp.) とした。

KSA03 (第3図9～12)

無文の土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ 2.7mm、幅 2.5mm、厚さ 2.1mm のやや扁平な広卵形を呈する。表皮全体を網状隆線によって覆われ、ヘソ（着点）が認められる。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属 (*Perilla* sp.) と判断した。

KSA04 (第3図13～16)

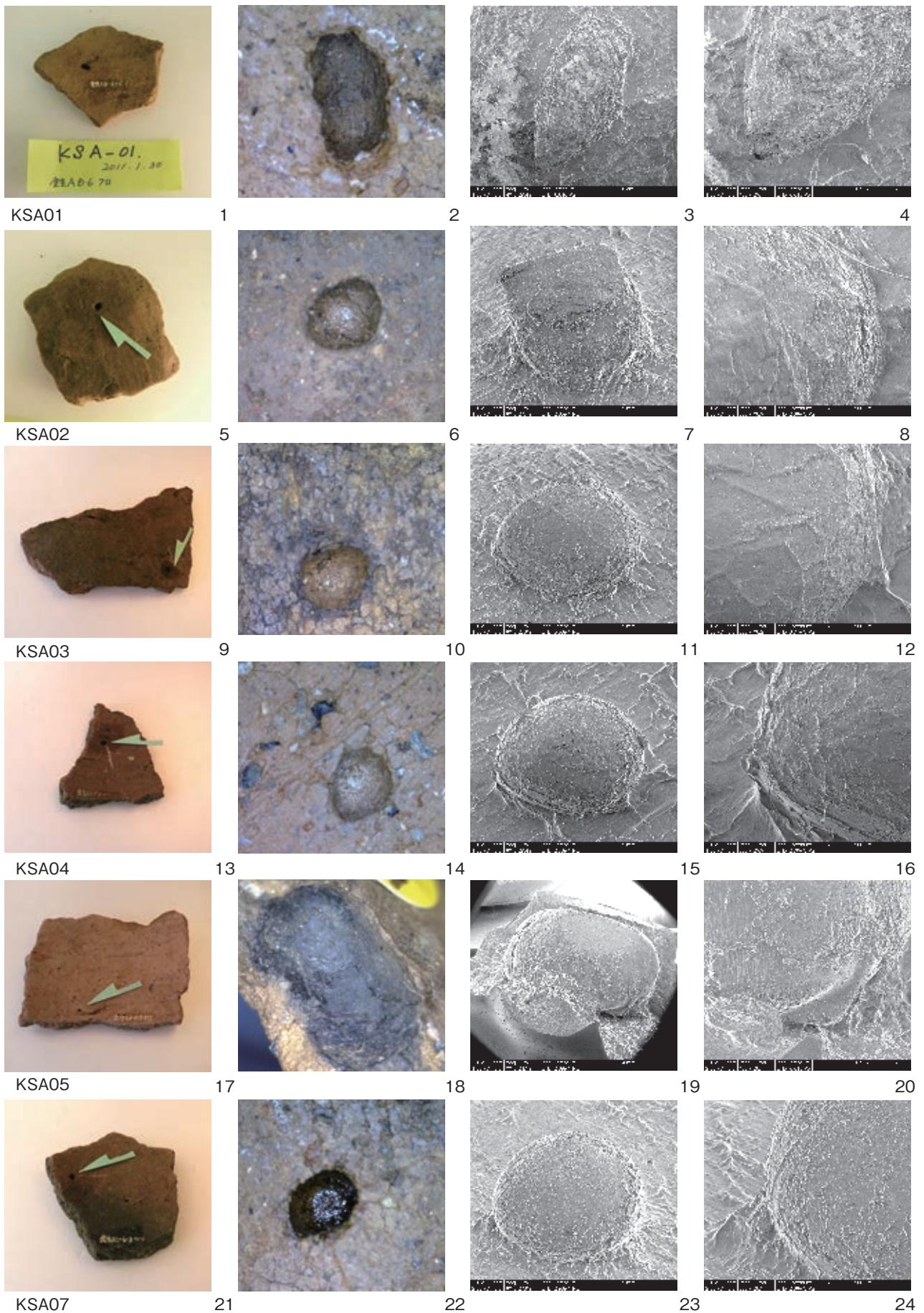
無文の土器片で、胴部内面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ 2.8mm、幅 2.5mm、厚さ 2.2mm のやや扁平な楕円形を呈する。表皮に不明瞭な網状隆線に覆われ、直径 1.0mm のヘソ（着点）が認められる。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属 (*Perilla* sp.) と判断した。

KSA05 (第3図17～20)

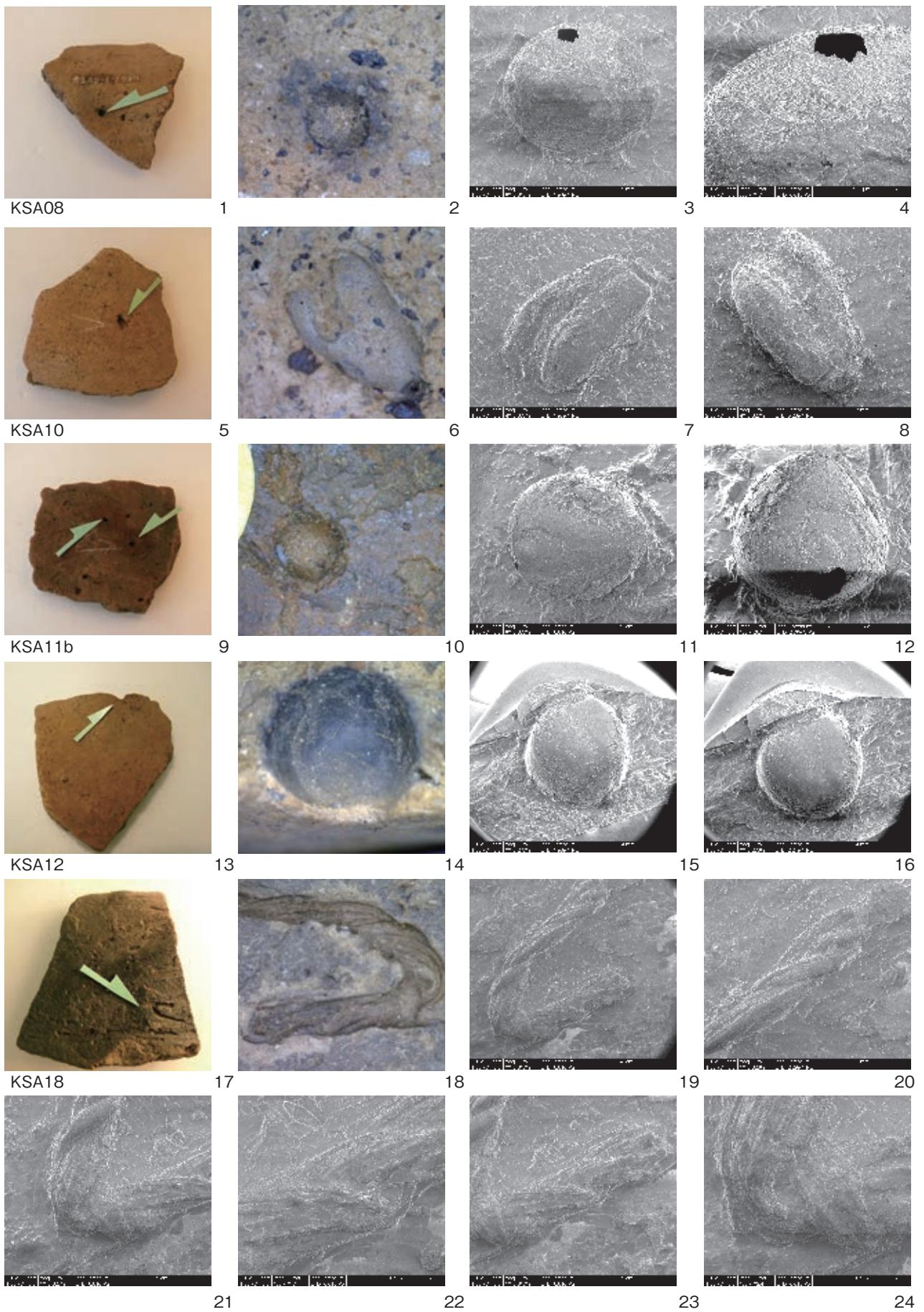
無文の土器片で、胴部内面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ 8.3mm、幅 4.9mm、厚さ 3.2mm の端部が平坦な俵形を呈する。表皮は平滑で外皮の剥離部分に筋状の沈線が認められる。端部に種瘤が明瞭に認められるが、臍部は抉れて確認できない。臍構造が不明で



土器写真：1.5.9.13.21
圧痕実体顕微鏡写真：2.6.10.14.18.22
圧痕SEM画像：3.4.7.8.11.12.15.16.19.20.23.24

第3図 金生遺跡土器圧痕1



土器写真 : 1.5.9.13
圧痕実体顕微鏡写真 : 2.6.10.14.18
圧痕SEM画像 : 3.4.7.8.11.12.15.16.19~24

第4図 金生遺跡土器圧痕2

あることから、アズキ近似種（cf.*Vigna angularis*）とした。

KSA07（第3図21～24）

無文の土器片で、胴部内面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ2.9mm、幅2.5mm、厚さ2.0mmの扁平な橢円形を呈する。表皮全体を網状隆線によって覆われ、ヘソ（着点）が認められる。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属（*Perilla* sp.）と判断した。

KSA08（第4図1～4）

無文の土器片で、胴部内面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ2.8mm、幅2.4mm、厚さ2.2mmのやや扁平な橢円形を呈する。表皮全体を網状隆線によって覆われ、ヘソ（着点）が認められる。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属（*Perilla* sp.）と判断した。

KSA10（第4図5～8）

無文の土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ6.3mm、幅3.8mm、厚さ3.1mmの隅丸長方形を呈し、中央部が大きく窪む。基部に穂軸と見られる部分が観察される。表皮は若干の凹凸が認められるが、同定の鍵となる特徴が見られず不明種とした。

KSA11b（第4図9～12）

無文の土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は、長さ2.5mm、幅2.3mm、厚さ2.3mmのやや扁平な橢円形を呈する。表皮全体を網状隆線によって覆われ、ヘソ（着点）が存在する。ヘソの直径は1.2mmで、中央部に渦巻き状の隆起部が認められる。形状、大きさ、表皮の特徴からシソ属（*Perilla* sp.）と判断した。

KSA12（第4図13～16）

無文の土器片で、胴部断面から圧痕が検出された。

圧痕は、現存長3.0mm、幅5.2mm、厚さ5.1mmの俵形を呈する。表皮は平滑。同定の鍵となる特徴が見られず不明種とした。

KSA18（第4図17～24）

無文の土器片で、胴部外面から圧痕が検出された。

圧痕は植物纖維を撫った縄で、全体は釣針状に屈曲し、長さ13.0mm、幅1.3mmをはかる

5 小結

金生遺跡において植物圧痕が認められた資料は、縄文時代後期から晩期にかけての土器群である。圧痕分析の結果、アズキ近似種（cf.*Vigna angularis*）1点、シソ属（*Perilla* sp.）5点、シソ属近似種（cf.*Perilla* sp.）1点、不明種5点が確認された。また、種子痕ではないが縄の圧痕が1点検出された。

本調査ではシソ属が多く検出され、縄文時代後晩期にもエゴマなどの利用が継続的に行われていたと理解される。また、この時期のアズキが確認できたことは、縄文時代中期以来のアズキ利用の継続性を窺わせる。

縄は、縄文土器の背紋具として多用されているが、圧痕として縄が確認される事例は極めて少なく、撫りの状態などを観察することができる貴重な類例と言える。

引用文献

丑野 肇・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 pp.13-35 日本国文化財科学会
山梨県教育委員会 1988 『金生遺跡II（縄文時代編）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第41集